

計画：9-3

霊長類表情筋における顔面神経と三叉神経の交通枝の観察

島田和幸・森山浩志（昭和大・医・第2解剖）
重政香代子・池田敏則（日本大・歯・解剖1）

ヒトの顔面神経末梢枝と三叉神経末梢枝との間には交通枝があり、藤田（1934年）をはじめ、そのほかにもいくつかの報告がみられる。1992年に島田らはこの交通枝について詳細な報告をしているので、今回、高等な霊長類について島田らと同様な方法で観察をし、その結果をヒトのものと比較検討してみた。

材料は、チンパンジー（3例）、オラウータン（1例）、シロテテナガザル（1例）である。観察の方法は、まず後頭部の頭皮に縦の割を入れ、ここから頭部の筋を頭蓋の骨から剥がすようにして前のほうに向かってはずしていく。つぎに頭部の筋につづけて顔面の筋と咀嚼筋の一部を、皮膚、脈管および神経などをつけたまま、ひと続きの筋板の状態で頭蓋から取り出す。その際、茎乳突孔、眼窩上孔、眼窩下孔およびオトガイ孔などから出てくる神経は、それぞれの孔を出た直後で切断する。神経分布を観察する際は、水中下で深層側から、すなわち骨に接している側から行う。

チンパンジー、オラウータンでは、顔面神経末梢枝と三叉神経末梢枝は両者とも顔面およびこれに続く部に広く分布している。眼窩下神経やオトガイ神経はかなり広い部に多く分布し、口角部を中心とした部では顔面神経と多くの交通枝をもつが、その形状は複雑ではない。眼窩上孔の周囲でも、交通枝はかなり認められる。シロテテナガザルでは、顔面神経末梢枝と三叉神経末梢枝の分布は両者ともあまり多くなく、口角部付近で1～2本の交通枝が認められるが、眼窩下孔および眼窩上孔の周囲では肉眼的には交通枝を認めることができない。

一方、ヒトの顔面神経末梢枝と三叉神経末梢枝は両者とも顔面およびこれに続く部に広く多く分布し、眼窩下神経およびオトガイ神経は、口角部の周囲で頬神経とともに顔面神経と多くの交通枝をもち、その形状はネット状となっている。また、眼窩上孔の周囲でもかなりの交通枝が認められる。

以上のことから、顔面神経末梢枝と三叉神経末梢枝との交通枝は、表情筋の発達のない高等な種

ほど複雑な形状を示すことが示唆された。

計画：9-4

霊長類の肝臓の輸入静脈・輸出静脈の分布型、心臓の血管系の形態（その2）および肝臓の動脈系の形態（その3）

宮木孝昌、伊藤博信（日本医大・医）

ヒトでは左門脈が存在することがある（Miyaki et al., 1987）。左門脈は胃の小彎の静脈の異常走行であって、その通路は肝胃間膜の左端を通して肝臓に達し、肝門の左端から肝臓に直接進入している。霊長類の各種の動物で胃の静脈の通路の変異を調査したが、左門脈は見られなかった。調査した動物は、類人猿のチンパンジー、シロテテナガザル、旧世界猿のショウハナジログエノン、アカゲザル、ニホンザル、新世界猿のヨザル、コモンマーモセット、セマグラタマリン、原猿類のワオキツネザル、スローロリス、ショウガラゴ、オオガラゴである。つぎに門脈の肝臓内分布を見ると、肝臓は肝門の右端で分岐する門脈の右枝と左枝の領域に区別される。ニホンザル（2例）とアカゲザル（1例）では、右枝の領域は6葉のうち外側右葉、内側右葉、尾状葉であって、左枝の領域が外側左葉、内側左葉、方形葉であった。この点が肝臓の分葉化を考えるうえで重要と思われる。

心臓の血管系の形態（その2）：ヒトでは、冠状動脈の心房枝が心房壁のほかに刺激伝導系の洞結節が存在する上大静脈口周辺に分布しているという点で注目されている（James, 1958, 1961; 水上, 1970）。今回、アカゲザルとショウハナジログエノンの各1例において上大静脈口に分布する1本の太い心房枝が見つかった。その心房枝はいずれも右冠状動脈から起こり、大動脈と右心房との間を通して上大静脈口に達していた。

肝臓の動脈系の形態（その3）：肝臓の動脈供給パターンを継続して調査した。新しい型の2重動脈供給の肝臓がニホンザルとチンパンジーの各1例で見つかった（Miyaki & Ito, 1993, 1994）。この肝臓は総肝動脈から起こる普通の肝動脈のほかに腹腔動脈から直接起こる肝動脈によって供給されており、ヒトの7型とは異なりMM型（仮称）として区別されるものである。原猿類（ワオキツネザル、スローロリス、ショウガラゴ、オオガラゴ）では、肝臓は総肝動脈から起こる肝動脈